

ナイジェリア

移動するアスリート

望月 克哉

グローバル化がいつそう進むなかで、従来の考え方では人びとの移動を捉えきれなくなっている。働く場を求める出稼ぎ者や移民がそうであるように、アスリートもまた活躍の場を求めて、これまでとは異なる動きをみせるようになった。本稿では、ナイジェリアのスポーツをめぐる生じた変化をあとづけてみたい。

●カレッジスポーツからプロへ

アフリカ人アスリートの活躍で、まず想起されるのは全米バスケットボール協会（NBA）の長身プレイヤーたちではなからうか。スーダン南部（現、南スーダン共和国）に居住し、長身で知られる民族「ディンカ（Dinka）」を出自とする選手たち、たとえば一九八〇年代から活躍したマヌート・ボル（Manute Bol）や、二〇〇〇年代にデビューしたルオル・デ

ン（Luol Deng）といった名がすぐに挙がるだろう。しかしながら実績という点では、ボルと同世代で、ナイジェリア出身のオラジュワン（Hakeem Olajuwon）を挙げないわけにはいかない。彼は学生時代から最優秀の名をほしのままにし、一九九三年にアメリカ市民権を獲得したのち一九九六年のアトランタ五輪ではアメリカ「ドリムチーム」の一員として金メダルに輝き、二〇〇八年にはネイスミス記念バスケットボール殿堂入りも果たしている。

一九六三年、ナイジェリア最大の都市ラゴスで生まれたオラジュワンは、地元のハイスクールに進学し、その長身を生かしてスポーツにいそしんでいた。そんな彼をリクルートしたのがヒューストン大学で、その在学中に三度も全米大学体育協会（NCAA）男子バスケットボールのセミファイナ

ル・トーナメントへの進出を果たしている。こうした実績により、「スーパースター」マイケル・ジョーダンらとともに一九八四年のNBAドラフトの目玉となり、人気チームのヒューストン・ロケッツに入団することになった。その後の活躍については、ロケッツでの彼の背番号34が永久欠番になっていることを語れば十分であろう。

オラジュワンのキャリアは「アメリカン・ドリム」そのもので、ナイジェリア人ばかりではなく、多くのアフリカ人アスリートが夢見るものでもある。カレッジスポーツで実績を積み、プロフェッショナルとして成功をおさめ、市民権を得る。プロスポーツのなかにはアフリカ人に馴染みの薄い野球や、およそプレーの素地がないアイスホッケーなど例外はあるにしても、アメリカはアフリカ人ア

スリートの活躍の場であり、その夢の地なのである。

●「アマチュア」としての成功

アメリカを足場にした成功という意味では、アマチュアスポーツもまた大きな可能性を有している。とりわけ陸上競技では、大きな競技会が頻繁に開催され、賞金が積み増しされたこともあって、アフリカ人アスリートの活躍が顕著になっている。バスケットボールがそうであったように、有望な選手をアフリカで発掘し、アメリカに招聘する道筋が築かれてきた。日本におけるアフリカ人長距離選手の活躍を想起すれば、カレッジレベルから、さらにハイスクールレベルの選手獲得に向かったことが容易に理解されるはずである。

あまたいる女性アスリートのなかで、短距離の世界を代表するナイジェリア人ランナーとして、まずはオサヨミ（Oladanola Osayomi）の名前を挙げておきたい。一九八六年、ナイジェリア南西部オシエン州生まれの彼女は、テキサス大学エルパソ校に進学してから国際大会で頭角をあらわし、二〇〇四年のアテネ五輪で四〇〇メートルリレーのナイジェリア代表となり、

シニア・デビューを果たした。二〇〇七年以降、オール・アフリカ・ゲームやアフリカ選手権で輝かしい成績をおさめ、二〇〇八年の北京五輪では四〇〇メートルリレーで銅メダルを獲得した。二〇一〇年にニューデリーで開催されたコモンウェルスゲームズの一〇〇メートルで金メダルに輝いたものの、ドーピングテストで禁止物質がみつかり、これを剥奪されてしまったが、ナイジェリアでの彼女の名声は依然として高い。

現役アスリートとして特筆すべきは、二〇〇八年に北京五輪の女子走り幅跳びで銅メダルを獲得したオカバレ (Blessing Okagbare) であろう。同五輪以降、アフリカ大陸での活躍はもとより、二〇一三年のモスクワ世界選手権、二〇一四年コモンウェルスゲームズでも複数のメダルを獲得し、トッブ・アスリートとしての名声を獲得した。彼女は一九八八年にナイジェリア南部デルタ州で生まれ、ハイスクール時代はサッカー選手として過ごしていたが、陸上競技に転向するや頭角をあらわし、二〇〇六年の世界ジュニアでは走り幅跳び、三段跳びで決勝進出を果たすまでになった。顕著な活躍は

オサヨミ同様、テキサス大学エルパソ校に進学してからのものであり、アメリカの選手養成の仕組みがもたらした成果であることは間違いない。

●実力者の国籍変更

今日、アスリートの国籍変更がそれほど珍しいことではなくなつたとはいえ、その経緯や背景を知れば、出身国をめぐる複雑な事情がみえてくる。アフリカ諸国では、競技施設などハード面はもちろん、選手の待遇やケアといったソフト面の立ち遅れが著しい。アフリカ人アスリートをめぐり世界的に注目された出来事として、ケニアの三〇〇メートル障害の選手ステイブン・チェロノ (Stephen Cherono) のカタルへの帰化があった。二〇〇三年のパリ世界選手権の直前に国籍を変え、サイフ・サイド・シャヒーン (Saïf Saeed Shaheen) と改名してのぞんだレースで彼は金メダルを獲得した。翌二〇〇四年には世界記録を樹立したものの、国籍条項から同年開催のアテネ五輪には出場できなかった。国籍変更の理由をめぐり出身国ケニアで論議が沸き起こったことでも記憶に残るケース

であった。

シャヒーンと同世代のナイジェリア人アスリートのなかにも、国籍を変更して活躍したスプリンターがいた。一九七八年ナイジェリア南東部アナブラ州で生まれたオビケル (Francis Obikwelu) は、一九九〇年代後半に陸上世界ジュニア、世界選手権の短距離種目でメダルを獲得し、将来を嘱望されていた。しかし陸上競技団体による待遇に満足していなかったオビケルは、この頃すでに拠点をポルトガルに移そうとしており、同国女性との養子縁組までも行っている。二〇〇〇年になってようやく彼を受け入れるクラブが決まり、翌二〇〇一年にポルトガル国籍を取得する。

国籍変更後は、二〇〇二年のヨーロッパ選手権の一〇〇メートルで一位、二〇〇メートルで二位となるなど実力を発揮し、二〇〇四年アテネ五輪の一〇〇メートルで銀メダルを獲得、二〇〇メートルでも五位入賞を果たした。これはオリンピックの短距離種目におけるポルトガル選手としては初のメダル獲得であり、その意味でも賞賛を浴びた。北京五輪の一〇〇メートルで決勝進出を逃したこと

から引退を表明したものの、現役を続行し、翌二〇〇九年にもポルトガル語圏諸国ゲームで優勝している。いまや地元のスター選手となったことはいまでもない。

●むずびつかえて

ナイジェリアの人口はすでに一億七〇〇〇万人を突破したといわれ、なかでも若年層が圧倒的な割合を占めている。スポーツに秀でた若者も少なからずおり、その能力発揮の場を求めている。ところが、こうしたアスリートの待遇は、ナショナル・チームですら満足なものではない。いわんや学校スポーツなどは、「有志」が支えている状況で、その才能を伸ばすことは期待できない。伝手をみつけてタレントを送り出すことがコーチたちにとっても最良の判断となる。

アスリートが安心して競技に専念できる環境と待遇、そうしたものが保障されない限り、ナイジェリア、そしてアフリカ大陸からの移動は止まらないのである。

(もちづき かつや／東洋英和女学院大学 国際社会学部教授)